

〔調査報告〕

鬼師の世界

——黒地：丸市，（杉荘），萩原製陶所（1）——

The World of Ogre-Tile Makers

—“Kuroji” as Fired Tiles: Maruichi, (Sugiso), and Hagiwara-seitojo (1)—

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University**E-mail: nawa@aichi-u.ac.jp***Abstract**

In this section, I introduce the forth group of ogre-tile makers in Sansyu. This group is essentially different from the other three groups about which I had already written. The other three groups have well-developed trees of genealogies. On the other hand the forth group does not have a developed tree of genealogy at all. However, it is certain that the forth group has a small tree of genealogy to some extent. Therefore, I will describe the forth group focusing on individual ogre-tile makers.

One of ogre-tile makers which have a small tree of genealogy in the forth group is Maruichi and Hagiwara-seitojo, plus Sugiso. However, as Sugiso does not belong to the “Kuroji” guild, I do not describe Sugiso here. In this article I only focus on Maruichi because the rule of the publication changed, I cannot fully develop one group of ogre-tile makers in one article anymore. In fact there might be some difficulties to understand the flow and/or connections among other articles. In any case Maruichi is a unique ogre-tile maker. Though Maruichi is one of ogre-tile makers in Sanshu, it does not make any ogres as a rule. Instead, Maruichi is a crest maker. As a crest is part of ogre-tile in Japan, Maruichi can be called an ogre-tile maker. The case of Maruichi shows how an ordinary ogre-tile maker transformed into a crest maker.

三州鬼瓦を生産する鬼板屋を大きく便宜上四つのグループに分けて黒地の「鬼師の世界」を描写しながら考察している。現実の世界を私自身による現地調査から得た理解に基づき、文字という記号からなる世界へと変換ないしは投影を試みているわけである。既に第1グループの山本吉兵衛系と第2グループの神谷春義・岩月仙太郎系及び第3グループ

である山本鬼瓦系については物語を終えている。ここでは最後の第4グループに入る鬼板屋群についてまとめてみたい。

第1, 第2, 第3グループはそれぞれ鬼板屋の元祖がはっきりとしており、元祖からの系統樹が発達している。そしてグループ内のつながりが鬼瓦の流儀、親方と職人の関係、血縁関係などにおいて明らかに確立されており、他のグループとの差異化を多面的に形成している。これに対して第4グループに入れた鬼板屋群は、系統樹が未発達ないしは不明な部分を多く抱えており、三州鬼瓦を生産する鬼師の世界の多様性を示す一群といえよう。

ここに至って三州鬼瓦の鬼師の世界に一つの全体的なイメージを描くことが出来る。その世界は3本の大きな木が三州鬼瓦の伝統という土壌の上に根を下ろし、枝を張っている。その木々のあちこちにはこんもりとした灌木が大地に影を落とし、それぞれの木々には豊かな個性があるものの、遠望すると三州鬼瓦という森を形成しているのである。そして前景化するその森の背景にあるのが「矢作川粘土文化圏」という世界なのである。その世界を成す基本的な色は黒である。黒地の鬼瓦が織り成す宇宙といってもいいかもしれない。これに「白地の鬼瓦の世界」を重ね合わせるとより実態に近い鬼師の世界が現れる。

ここでは第4グループを紹介していくが、他のグループのように十分な系統樹を成していないので個々の鬼板屋として描いていく。第4グループに入る鬼板屋が、(株)丸市、萩原製陶所、鬼福製鬼瓦所、藤浦鬼瓦、柳沢鬼瓦(株)、鬼十瓦店、山下鬼瓦である。

〔I〕 (株)丸市、(杉荘)、萩原製陶所

第4グループは確かに発達した系統樹は持たない。しかし、小系統樹は形成しており、その一つが(株)丸市と萩原製陶所である。この2つの鬼板屋がいかに繋がっているのかを個々の鬼板屋を描きながら見てみたい。(有)杉荘は白地組合所属なので、ここでは取り上げないが、丸市と萩原製陶所を繋いでいるのが杉荘である。

(株)丸市

三州鬼瓦を生産する鬼板屋の中でひととき異彩を放っているのが(株)丸市である。鬼板屋とは普通どこへ行っても仕事場や、事務所、倉庫や、そして敷地内にも白地の鬼瓦と黒地の鬼瓦がゴロゴロといった感じで置かれている。ところが丸市の事務所を抜けて工場内にひとたび入ると、いたるところに積まれているのは、鬼瓦ではなく「家紋」である。家紋は鬼瓦の一部として使われ、後は用途に応じてサイズや形が変化していく。丸市は家紋を専門に生産する鬼板屋なのである。丸市を訪れて圧倒されるのは工場の奥二階にある家紋の型置き場であろう。余りの数の多さに逆に自分の目を疑ってしまうほどである。家紋の種類は多岐にわたり、その数は五千種類は下らないと言われている。それらが多様なサイ

ズや形を持つのであるから、さらに必要とする型の数が増えていく。実際に現場を自分の目で見てみないとその凄さはわからないが、現在の丸市を体現している場所が家紋の型置き場である。第二代丸市の加藤元彦にその理由を話してもらった。

あの、家紋帳にね、5千種類のっているんですよ。それには5千種類で1種類に対して5段階も6段階も段階があるわけですよ。一つのものに。

サイズが違う。鬼の中でも大きいやつ小さいやつあるんです。そうするとえらい数です。で、あの家紋帳にのっとらんのも相当あるわけです。上で(家紋の型置き場)見もらった苗字なんかも紋張に無いし、だから屋号なんかものってるわけじゃないし、本当にえらい数なんです。僕はあんだけのやつがあっても、型を置くのに困るなと。もう一つ空を、あの、工場を造ってね、収める場所を造っていかんとこの先いかなってなと。

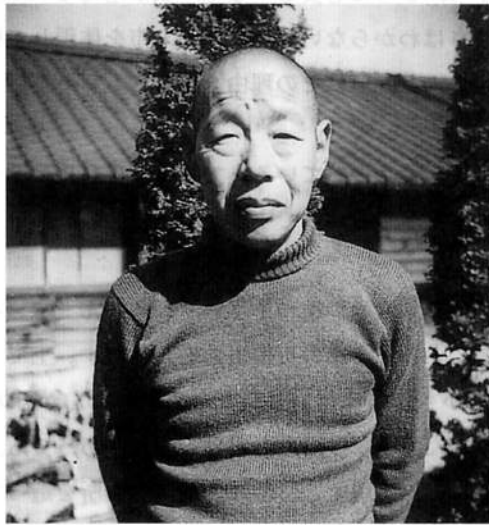
現在の丸市の様子が少しでも伝われば幸いであるが、丸市はもともとは他の鬼板屋と同じように鬼瓦を作っていた。丸市の初代は加藤元彦の父に当たる加藤晴一である。明治39年(1906)生まれであり、昭和53年(1978)に数え年73歳で亡くなっている。屋号は丸市ではなく、「丸市鬼瓦工場」であった。二代目の元彦は父、晴一について語ってくれた。

うちの親父はね、ほんと職人でしたね。うん、仕事一筋で一生終わった人だなと僕は思うね。そう、いろいろかの役をやるとか、友達とわいわいやってどっか遊びいくとか、そういう事は無かった人だと思う。で、まったくの職人肌って言いますかね。技術は確かなものがあったと思う。僕は今ある作品見ても、素晴らしい技術を持つとなあ思ったもんね。

元彦の語る晴一は職人そのものであり、職場で黙々働く、堅気の人だったようである。その働く父の姿を見て元彦は育ったといえる。(第1図参照)

うん、夜の11時、12時までやるのを度々、しょっちゅうって言ったらいいくらい、見ておったんでね。そいつに、やはり、付き添わないかん。相対する話し合い手が無きゃいかんで、お袋がそこで手伝ったりなんかしておったようだったね。

で、僕らは、やはり、親が遅くまでやってや、その側で遊んだり、学校の勉強の、「国語の本持って来い」とか言っちゃって、「読め」とか言われて、読んで、こっちが



第1図
初代 丸市鬼瓦工場
加藤晴一

つかかえながら読んどると、「何を怠けとるだ」ってピチンと頭を叩かれたりとか、そんな事は覚えがあるから。(笑い)

教育には案外厳しい人だったね。自分が学校出とるだけにね。生真面目な人だった記憶は僕は持っているだけど。年を取ってからは、まあ、それは、怒った事もないし、73で死にましたからね。

ただ晴一は職人氣質の人だったとはいえ、同時に親方でもあった。丸市鬼瓦工場は当時、高浜でもかなり大きな鬼板屋であった。

うちの親父も職人でしたから、作ったものを、いい物をお客さんに買って頂くと言うか、今のような、この、素早い、すばしっこいってうかな、そういう時代でもなかったし、何でもその、注文されると、「へい、ようござんす」ってなことで作って、「出来やした」ってなことで済んだ。

まあ僕(元彦)が入ったときは従業員が4人ぐらいしか居なかったしね。それはまあ、全部、仕事出来るっていう人間ばかりです。手作りも出来る。で、あの、その前は、あの、僕はまだ、その、生まれは、生まれてからかな、その頃には7、8人弟子が居ったそうです。

7、8人の職人を抱える鬼板屋は高浜では大所帯の鬼板屋であったことを意味する。その

事は、山本鬼瓦の山本信彦にインタビューをした時に、「鬼板屋のモデルにしたのが丸市さんだった」と言われた事と符合する。「丸市さんはいわゆる職人さんを凄く抱えて、大々的にやっていて、あれをモデルにしてやったんです」といい、山本鬼瓦は事実、そのモデルを自ら実現させていると言って良い。この事を元彦に話すとすぐに、なぜ山本信彦が若い頃、鬼板屋のモデルとしたのかを肯かせる言葉が返ってきた。

まあ、そう言って貰うと嬉しいけども、ま、「鬼屋の百貨店」てことは言われとった。

「鬼屋の百貨店」と言われても直ぐにピンと来なかったので、その意味を元彦に尋ねてみた。

「丸市行きゃー、何でもある」って。まあ、在庫品が物凄かったです。もう、暇なときは何でも作らせて、職人に作らしとったからね。倉庫の中いっぱい入っ取りましたでね。そんなのを言っているじゃないかな。

まあ、大体、高浜あたりの人は（鬼板屋は）ちょっと荷が溜まってくると、「ほれほれ」といって売り歩いちゃったりしちゃうけど、僕はまあそんなことはしない。じつと静かにしとった方だから。それで一番僕の所のは高かった。高くても、ほいでも買ってくれる人はいるよってね。「丸市が一番高い」ってことは皆言っておられたと思う。けど、何でもあるという。

まあ最後、いつになるだや…、ガス窯の、昭和40年、50年。昭和50年ごろまで。昭和50年ごろまでは…、職人がまだ5、6人ぐらい居ったでね。その人たちが全部作ってたからね。それで、出来ますわ。窯が二つあって、常時、焚いとったでね。で、山本君がいうのも有り難い話だけど、うなずける点があるね。

加藤晴一^{もと}の下にいた7、8名の職人の中から独立したのは二人であった。一人を杉浦五一といい、現在、「杉荘」となって続いている白地屋である。その杉浦五一は平成16年(2004年)に亡くなっている。もう一人が市古毅^{いちごたけし}といい「市古鬼瓦店」を興している。さらにその兄、市古朗^{あきら}が「三栄鬼瓦店」をやり始めて、いわゆる丸市の系統樹は広がっていった。このように系統樹は常に変化しており、固定したものではない。

さて話の順序はここで逆転する。丸市鬼瓦工場を始めた加藤晴一も、もともとは職人で、小僧から叩きあがった人である。つまり、現在の丸市の原点についてここでは見てみ

たい。初代の晴一は市古吉太郎の経営する「鬼吉」という鬼板屋で修行した。現在、この鬼吉は無くなっている。昔の鬼吉は、今のアイシン精機碧南新川工場の一角に地所があったという。なぜ、晴一と鬼吉が繋がったか話を元彦は語ってくれた。

たまたま、うちの親父（晴一）の姉さん、名前は「いち」と書くんですけど…。「おいちさん」、「おいちさん」と言われとって「いち」という人ですけど、この方がうちの親父と姉弟、これは出は吉浜、僕の村なんですけれども、そっから嫁して行かれて、この市古吉太郎という人の奥さんになられたと。

で、市古吉太郎さんの所で職人さんがようけおって、手広くやってみえたのだけど、弟、うちの晴一というのが弟ですけど、「ちいとうちの仕事を手伝いに来んか」というようなことで、当時、親父は小学校を出て岡崎の中学校へ行ったんですけど。その頃は中学校行く人が少なかったと思うけれども。そして、中学校を終わって直ぐお姉さんのところにお手伝いに行ったと。そういう繋がりで。

丸市鬼瓦工場と鬼吉は姻戚関係の発生が元で、晴一は鬼吉の小僧として入ったことになる。ただ鬼吉の親方である市古吉太郎は、職人タイプの人ではなかったらしい。吉太郎について元彦は次のように述べている。

だいたいお金持ちで、お坊ちゃん的存在だったらしくて、本人そのものはさほど仕事をする人じゃなかったみたいね。金儲けは上手い人でね、職人は抱えておったし、そのほかにも色んな役職をやったりなんかして、まあ、仕事そのものを精出してやって人じゃなく、だいたい、職人任せで、職人が動いてやっておったと…。

で、僕らの記憶だと、僕も、その人が年食ってからずっと知ってる訳だけれども、なかなか頑固な人で、気の強い人でしたね。まあ、年食ってからで、幾分かそういう点は無くなったと思うけども。それでも、うちの親父に言わせると、「気を抜くと何か飛んで来る位の人だった」という話はしりましたね。

「鬼吉」の屋号から推し量るに、市古吉太郎の「吉」を採って「鬼吉」としているはずなので、吉太郎は初代だと思われる。しかし、なぜ吉太郎が鬼板屋を始めたのかはわからなかった。下の元の部分^{もと}を突き詰めていくと、見えなくなってしまうのである。この事ほどの鬼板屋にも言えることなのであるが、第4グループはそれに至るまでの浅さが大きな特徴になっている。吉太郎はもともとは田地をたくさん持つ地主で、小作人に作らせてい



第2図
初代鬼吉
市古吉太郎

た人だという。幸いにも当時の鬼吉の写真が残っており、これを見ると、工場の中にたくさん職人が働いていたことがわかる。

僕は記憶があるで、この工場も知っとるでね。全部手造りで、一品作品で、型も何も無い。手でほんとに作るだもんね。そりゃま、ももぐってやっても結構出来たわね。そりゃ、今みたいに型だと、相当場所が無いとやれないけどね。手でこう、土を丸めて、張っていく位のことだけね。一日やっても幾らも出来ないだろうし、それでも商売になったって時代ですよ。

鬼吉さんのその前というところちょっと分かん。(第2図参照)

このように鬼吉が職人を多く抱えて、鬼板屋を経営していく方式を晴一は独立後、意識して採り入れていったように思える。ちょうど山本鬼瓦の山本信彦がそうであったように。さて、「丸市」に戻ろう。晴一は初代だから、「鬼晴」という屋号が当然の事ながら考えられる。ところがそうならず「丸市」という変わった屋号になったのは何か特別な事情があったと見て間違いない。二代目の元彦はこの件について次のように説明している。

これは、うちの本屋はこっちから、まあ、百メートルくらいしか離れていないですけども、先祖代々、「市郎右衛門」って言って。あの、加藤市郎右衛門って言うんです

けども、先祖代々、「市郎右衛門」で通して来てるんですね。で、親父の兄弟も市郎という名前だったんだけど、その先代が亡くなってから市郎右衛門。

で、最初、親父が、こう、姉さんのとこで修行して、自分がやり出した時に、「俺も手伝ってやらあかなあ」って、兄弟でやりかかったみたい。「じゃ、名前をつけにやいかん」というわけで、「ほいじゃ、市郎右衛門の市で、あの〇（丸）に市にせよ」と。これが始まりです。

「丸市」は「㊦鬼瓦工場」として出発したわけである。丸市の屋号の起りが上に示しているように、事実上、晴一の兄である市郎右衛門の名前に由来している。つまり、晴一と市郎右衛門の二人の兄弟の共同事業として始まったといえる。そして兄が資本を出し、弟が技術を提供したが故に、兄の名を採用したのである。ただ、後に兄はこの事業からは手を引き、弟の晴一が丸市鬼瓦工場の創業者の一人として残ったのであろう。また、それがゆえに、晴一は職人としての性格を色濃く持っていたものと思われる。

「丸市鬼瓦工場」の屋号は二代目加藤元彦によって昭和40年に「株式会社丸市」と社名変更している。世代交代を象徴する出来事だったと思われる。元彦はその理由を次のように述べている。

その、商売というのは大きくしたいというのが一つあるし、松坂屋の商標がね、やっぱり、株式会社松坂屋ですわね。で、最初に、始めに、株式会社って来た方が格好が良かったってな感じがしてね。で、「丸市株式会社」だなんて、「株式会社丸市」っての方が、こりゃかっこいいじゃねえかって言って。で、そんなことから、そんなものを作った。最初はやっぱり松坂屋をイメージした。あのくらい大きな仕事をやりたいな。かっこいいよね、株式会社松坂屋って言うよね。で、そんなものもじりながら作ったっていう。

名は体を表すというが、(株)丸市は文字通り「鬼瓦工場」を切り離して現在に至っている。それが鬼板屋を実質上やめて家紋専門店となった現在の丸市の姿である。(第3図参照) その二代目加藤元彦は昭和12年(1937)に生まれている。

終戦の年が小学校4年生ですかね。空襲なんかも経験したもんですから。といっても、この辺りが空襲に遭ったというじゃない。あの、名古屋の空襲、照明弾が、チラリ、チラリと遠くでしとるの、あるいは、岡崎の方、空襲だとか、というようなのを遠



第3図

第二代丸市 加藤元彦 家紋「丸に下り藤」

くから眺めておって。さあ、艦載機が来ると、「防空壕へ入るぞ」といって、防空壕の口から頭を覗かせて、「ああ、飛行機が来る」、「飛行機が来る」といって眺めておったくらいの歳ですから、古いといえば古いですけどね。

元彦の子供時代は鬼瓦の思い出に繋がっていく。餅屋は餅屋というが、小さい頃から一般とは違ういわゆる「鬼師の世界」に生きていることがわかるのである。

僕らは、まあ、小学校の頃はやっぱり、親父がああ、小僧上がりで来たもんですから。小さな時から、まあ、小学校時代から、親父が仕事しとると、「こっち来て、ちょっと手伝え」ってなことで。あ、今日も紋なんか起こしているのですが、ああいう起こしをしたり、鬼瓦を起こしたり、土を練って繋いでいく。まあ、そういうのは常時やっとなったですね。

中学校くらいになると、窯は朝、あ、学校に行く前に手伝って、それから、学校から帰ってくると、また、あ、夜中の9時、10時まで、親父たちがこうやってると、手伝ったりとか。そういうた、こう別に技術を教えてもらったって言う訳ではないけれども、門前の小僧っていうのか、自然に覚えて来たっていうのかね。

元彦は次のような思い出も語っている。現代の小学生は習い事や塾などで忙しいかもしれないが、今とは違う生活があったことを物語っている。

僕はね、5人兄弟で、男が一人です。僕が長男で、あと妹ばかりです。僕が一人で手伝ったわけじゃなくて、妹たちもやはりそういう時代に育って来たから、多少は手伝っておいりましたわね。遠くへ鬼持っていくのでも、今のように車がありゃへんし、リヤカーで、あの、安城や何か。安城でも、大岡というところに瓦屋があった。そこから辺まで、朝暗いうちから荷をリヤカーで持ってって、向こうへ行くと、「やあ、よう来てくれたな」ってことで、ご飯呼んでくれる。帰りには土産を持たせてくれて、うちに帰ると、また暗くなっとなえ。

そんなことで、もうこれはね、小学校のころで、これはね。小学校高学年の頃で、そういう事やっとなえ。

「一人で行かれたんですか」と聞くと、

妹と二人で。そうじゃないと、荷物を一杯積んどるとね、ちょっと坂があると上って行けへん。今みたいにアスファルトじゃないし。小さい時からそういう家庭の手伝いというものはしたもんだ。どこの子もみんな同じだったと思いますよ。

元彦は家の仕事を手伝いながら、中学校、高校へと進み、サッカーに熱中し、大学は愛知学院大学商学部に入っている。しかし、行きたかったのは美大であったという。

どっちみちね、うちの仕事手伝わんといかんし、あの、僕は跡継ぎだという、自分にもそういう気持ち持っておりましたのでね。うちの手伝いはしなきゃいかんだろうとぐらいは思っていましたけどね。

そりゃ、まあ、大学は愛知学院行っただけですけども。その、大学は、まあ、美術系行こうと思って、京都府立と、金沢の市立の、^{わたくしりつ}私立ではなくて、市立のね、あの、美術大学受けたんですよ。見事にね、実技でやられちゃってね。

美術が好きで、陶芸家になりたかったという元彦は、美大をあきらめて商学部²に席を置いている。そして大学を卒業するや、丸市鬼瓦工場に入るのである。

迷いは無いです。もう、あの、自分で、「鬼瓦はやる」と決めておりましたけどね。そういう迷い、皆が、あの、どっかへ行く、就職試験で大騒ぎしとったけども、まあ、その頃は、就職試験で大騒ぎしとる頃にはサッカー楽しんどった。

元彦は丸市に入ると、得意先を拡張するために特に外交に力を注いでいる。昔からの鬼板屋を営んでいる晴一の仕事の販路を新しく作り始めたのである。職人肌の晴一がしなかったことであった。

僕はうちへ入る時に、あの、(職人が)4人ぼっかしおったし、そういう人たちが作ってくれるから、その仕事の合間を見ちゃ、県外をずうっと走り、そして、あの、お客をこう拾って来たりね。あの、親父の代だとそれまでせんでも、結構商売になった。それで段々こう時代が変わって来たので、うちでじっとしては駄目だ。で、僕が開拓してきた。それで、三重県、滋賀県、あちらのほうはもう非常に売れました。

元彦は販路拡大には努力したが、強引に他の鬼板屋の得意先を盗^とることはしなかったと言う。元彦自身の持つ潔癖さや信条のようなものがあった。

僕はまあ、人様のお客さんを盗ったという事はないんですわ。もっとも、かちあう時はありますよ。あの、僕は外交したりもしましたしね。ほんと、話して、取りそこねた、「あそこのお客さんかい」という事がありましたけれども。だけど、無理やりに盗ったってことは無いんですよ。まあ、互いに「また足らんもんがあったらそう言ってくれ」ってね、言うぐらいなもんで。あっさりと帰って来る。顔出しくらいの事で。

僕は、滋賀県、三重県あの一円を全部歩いて、お客を取って来たです。親父はそういう外交的な事は好きな方じゃなかったから。で、僕が仕事のあいを見ちゃ走ってく。そして手広く、こうずうっと回って来て。で、お客さんでも県外行くとなかなか良いお客さんを引っこ抜くってのは、掴むというのは出来ないんで。

田んぼの畦道^{あぜ}に入って行って、そこで百姓の人に、「あそこに瓦屋さんがあるが、あそこの内容どうですか」と聞いて、いろんかの事を地元の人と話をしながら、あそこなら間違いないぞって確認を得てから、そのお客さんに会うようにするって、僕はそういう式でお客さんを拾って来たんだね。

ところがそういったやり方を取っていた元彦に事件が起きる。そして何とその事件を契

機に元彦は鬼板を作ることを止めるのである。これがそのまま、転機となり、鬼板屋から、家紋専門店へと変貌を遂げたのであった。

そんなところで、たまたま同業者の人に3軒良いところをスパッと盗られた。まあ、その頃は職人はまだ居りましたが、職人も年食って来ちゃったし。まあ、機械に、ほとんど機械になって来ておるし。手造りやって居っても値段も機械に引っ張られて行っちゃうし、「こんなことをやってもしょうがねえなあ」という頭があっただね。

何か良い事無いかなあ、いいこと無いかなという頭がしょっちゅうあった。ほいで3軒一気に盗られた時にね、「もう止め!」「もう、こんな一緒に窯の飯を食った間柄でね、取ったり取られたりなんて事を俺はやったことは無いのに、馬鹿にしてけつかる」ってね。で、総会の席でね、僕が喋った。そいで、その人間を目の前に置いてね、「手前みたいなのは半殺しにしちやるぞ」って拳骨握ってたら、ほしたら、皆が止めてくれた。

ま、それで止めた。それで、「鬼屋は止め!」ってスパッと止めちゃった。

確かに同業者に得意先を3軒盗られたことが、契機になってはいるが、他の要因も関連していることも事実である。まず、父親の晴一が亡くなって直ぐの出来事であった。元彦が42歳頃であった。厄年でもある。また、仕事場には手作りの職人は健在ではいたが、高齢化が進行しており、さらに、鬼瓦の機械化が業界全体に進んで手造りの鬼板屋を圧迫するような状況になっていた。また元彦自身もこういった事態に対応する方策を既に探っていたのである。

あの、鬼瓦ずっとやって来て、鬼瓦も従来通りやっておりました。で、まあ、親父から身上受け継いで、あの、身上全部引き継いでからですけどもね。まあ、親父からやってきた鬼瓦だけじゃなくて、何か一つやりたいな。鬼瓦を止めるって事はないですよ。鬼瓦をやりながら何か。ちょっと便乗式にやりたいなという事でね、盆栽鉢をやったです。

あの丸い、あの、駄鉢じゃなくて、四角いそれを遣り出したんですね。で、親父がね、「そんなのは止めとけ」と。「鬼でやって食えるんだから、そんな事やらんでもいいじゃないか」と言っとった。でも親父からもらったもの受け継いでそのままやってくのもね。まあ、「息子として何か埒があかん」と言われるのが癪でね。「よし、

俺、何かこう一つ始めたでな、こういう息込みだったんです。

ただいきなり盆栽鉢へ移らず、まず鬼瓦に関連のある紋から始めている。それから鉢へと進んでいる。

紋をちょちょっと遣り掛かりつつあった時でな、親父が死ぬ時は。その頃だ。で、まあ、紋を遣り出す。かといって宣伝をするわけでも無し、売り込み行った訳でもないけど、「丸市さんが、紋やりだいたげなつてぞ」って捌^{きぼ}いてくれおつて、捌いてくれたけども、僕は「こんなことじゃ、紋だけじゃいかん」と思って鉢をやりだいた。あの盆鉢。

この鉢が始めたころは売れに売れたらしい。ところが流行る商売には直ぐにその上に行く商品が開発されていく。ちょうど、手造りの鬼瓦に対するプレス製の鬼瓦のように。それがプラスチックの鉢であった。

あんな鉢やりだいて4年間やったね。4年間やったけど、最初の頃はいくらでも売れてくわ。圧力鑄込みっていつて、型をずっと並べといて、何本かやっつて、下から泥をどろどろに溶かした泥をキューツと圧力で入れてくだけども。順番に入れてくだけども。順番にとって製品を出して、そしてまた積んでいく。一日やれば一人の人間でも相当できるわけ。で、窯もシャトルの窯があつて、三日に一週ずつくらい焚きおつて、そんだけの製品が全部出来てくだね。もう、素人が、一、二、三、四、五人ぐらい居ったかな。

結構いい仕事でね。「面白い仕事があるなあ。この素人が簡単に遣れちゃうわい」と思って。どんどん、ちったあ疵があつても売れてっちゃう。で、そんなのがね、この辺から西尾、吉良のほうにかけて苗床つてね、松はもちろんのこと、木瓜^{ぼけ}だとか、ピラカ^{ピラカ}だとか、姫林檎だとか苗物を鉢に入れて東京へ出荷する。そういう業者がいくらでもあつたんです。そういう所へ僕ら売りに行くわけ。

ところが、それがね、僕が4年ぐらい遣つたらね、もうプラスチックが出だした。プラスチックが出だしたらね、まあ、そんなものは全然買ってくれん。植えたものはどんなものに植わつておつてもいいで。植わつておればいいわけ。で、プラスチックなら軽いし割れんし、まあ、ぜんぜん見向きもせんくなつちやつた。「まあ、これはいかん」と思って止めちやつた。

このような結果になり、元彦は再び紋に戻るのである。紋が父、晴一から距離を保つにふさわしい対象であると、元彦は気づいたのである。そして紋に特化する決意をさせた事件が、鬼瓦の会合での爆弾宣言だったのである。これによって、元彦は表向きは得意先を取った同業者への怒りの爆発であったが、鬼瓦から身を引くことにより、心の中の葛藤であった父、晴一と事実上、決別し、独立したのである。ただ丸市にはまだ鬼板師の職人が居たので、鬼板師には鬼瓦を作ってもらいながら、元彦本人は紋に特化させていったわけである。1999年のインタビューで次のように元彦は話している。

もう15年くらい鬼は一切。まあその頃はね、20年位前は職人さんがね、鬼を作る職人さんがね、一人、二人、三人やっばり四人居ったな。だけど、その人たち今一人も残っておりませんでね。死んじゃいましたからね。で、ああいう技術仕事というのはね、あの、70になっても75になっても遣れるんですよ。まあ、大きなものは重たいから上げてあげなきゃいかん、手伝ってあげなきゃいかんて。技術は衰えるものじゃないですからね。

結構年寄りの人は皆作りましたよ。どうしても仕事がやれなくなってやめる人たち。それまではね、ずっとうちで遣ってくれました。やはり惚^ほけんで皆死んでるね。

丸市では紋は原型を作り、その石膏型を形成し、手押しで紋を一つ一つ丹念に仕上げている。一時期、圧力鋳込みの盆栽鉢を生産していた関係で、その時の経験を生かして、圧力鋳込みの紋を作ったこともある。しかし、型から抜きやすくする為に紋の図柄が上方に台形状となり、図柄そのものが小さくなる欠点があった。顧客から「こんな奴は柄が小そうなっちゃって見えやへんぞ」と苦情を受け、手押しの紋に切り替えたという。

「相変わらず、こういう焼き物^{もん}てのは泥臭いところに値打ちがあるんだな」と思っ
て。余り綺麗な物を作っちゃいかん。「泥臭いものもいいだな」と思っ

元彦は家紋作りの苦労話を率直に語ってくれた。苦労話の中に物作りをする職人の姿と、その物自体の特徴が現れてくることに気づかされる。

土の吟味ってのが大変でして。小さなものを作るには土や何かはどうでも良い訳で。大きな紋になるとやっぱりその可塑性の問題だとか色々なことがありましてね。その疵が出やすいんですよ、大きくなると。大きなものが案外あるんですよ。そんなものが失敗ばっかしとっちゃだね、こりゃいかんわけで。何遍か失敗したことも経験が

あるだけだ。

ほいで、土をもう探すのに難儀したね。かと言って、その、綺麗に起こせて、余り手を掛けなくっても製品にならなきゃいかん。あの表面の柄を全部へらで磨いたりなんかしたら、それは採算に合いません。だから、一度ぐっと押したらもうさっと入って、磨いたと同じ格好にならなきゃいかんと、こういう式で。

だから、分子の細かい土で、ある程度、可塑性があって、大きなものでもある程度疵が出ないような土でいうとね、こりゃ大変です。これに出くわすまではね、ほんとに難儀した。ま、でも、どうやら失敗失敗重ねながら、まあ、そこそこかの物まで出来るようになりましたけどね。

元彦は様々な葛藤を経て鬼板屋から手押しの紋屋に変わり、この業界で異色な世界を形成してきた。事実、インタビューの端々で、「鬼瓦との決別」を語っている。ただそのように何度も語ることは逆に鬼瓦に愛着がある印とも取れるので再度、次のように訊ねてみた。「鬼瓦にもう一切以後戻って気持ちは無かったですか」と。これに対して元彦は次のように答えている。(第4図参照)



第4図

(株)丸市の作業場 加藤元彦(手前)家紋を型に手押し中

無かったって言うか、無くなっちゃった様な気がしますね。自然と。

ほんだけど、どっかに自分がやって来た鬼瓦というのは魅力を持っているわけですね。だからここに来てからでも鬼瓦をちょこちょこ作るですよ。作った経験が有りますから、結構出来ます。

刈谷の市原神社のやつもここ2年ぐらい前に作ったし、この間も兵庫の方へ行って、これは無量寿寺というとても大きくて大きなお寺ですけど、其処のひとつを作らせてもらって出荷をしましたが、これは大きいですわ。去年の十月の初めからこの四月のいっぱいまで掛かったかな。まあ、僕ら家紋は主力ですから、その間に、土曜日、日曜日に鬼をつくっとるですからね。

だから、ぶっ通し係っとる訳じゃないんで。でもやりました。

まだ、これからも大きな奴を作らんといかんですわ。注文が入って来とるもんで。

本業は家紋作りであるが、いわば副業として、鬼瓦を事実作って来ている元彦はこう言っている。

気持ちの中では繋がっているからね。「俺もまだ鬼師だ」という気持ちがある。

元彦はその気持ちを行動で直接に示して来ている。昭和54年に鬼瓦認定協会を作ったことがそれに当たる。そのときの中心メンバーが神仲（神谷伸達）、鬼長（浅井邦彦）、そして丸市（加藤元彦）であった。また、名鉄三河線高浜港駅前の直ぐ近くには4メートル50四方ほどの大きな古代鬼面が設置されている。平成7年に元彦が息子の佳敬に手伝わせて製作している。「遊びで作った」と元彦は言うが、元彦の鬼瓦への愛着を物の形に表した巨大なモニュメントである。（第5図参照）

鬼瓦への愛着は鬼瓦が屋根で使われる基となる和型の燻し瓦へと及ばざるを得ない。特にここ10年足らずの間に、釉薬の平板瓦を使うハウスメーカー主導による、見た目にモダンな感じを受ける洋風な家が急速に増えた。逆に、和型の燻し瓦を使用する和風建築の新しい家は少なくなって来た。和風の家屋根に鬼瓦は載るのであるから事態は鬼瓦業界にとって深刻な問題である。この事は鬼瓦業界のみでなく、われわれの生活そのものにおいて重大な問題を孕んでいる。それは日本の伝統的な町の景観が急速に変わっていること

を意味する。日本の伝統的な葺の波を眺めると、ある独特な清涼感を覚える。しかし、平板瓦からなる屋根にはその感覚はない。その清涼感はそのまま日本人の美意識や神意識へと繋がる。なぜなのか不思議に思っていたが、元彦が一つのヒントを与えてくれた。

日本の伝統的な風土から色々考えると、和型で燻しで来てくれたらいいな。そうすると環境美化にも役立つんじゃないかな。釉薬の瓦とは、どちらかという鉛分が多少あるんです。薬の中に、で、一生懸命で減らしておるけども幾分か鉛を使っているんです。で、それが公害になるんです。

で、僕らの燻しの製品はかえってそういう産業廃棄物として今は扱っているけども公害的なことは一切無いですよ。かえって浄化できるんですよ。昔はね、海やなんかでもどんどん捨てておったんです。そうすると、その間に魚の一群でもおったんです。で、今でも川やそういうところに瓦がぶち込んで在ると、水が綺麗になるんです。浄化になるんです。で、鉛分は全然無いし。

この表面にね、雨が当たって飛ばしが飛びますと、マイナスイオンが発生するんです。たたいもマイナスイオンが発生するって事は浄化になるわけです。



第5図

古代鬼面（約4.5 m²）名鉄三河線高浜港駅前 加藤元彦作

このように、和型の燻し瓦のマイナスイオン効果を日本屋根への独特な清涼感として人々は感覚的に捕らえていたように思える。そして燻し瓦が何百枚も葺かれた一軒の和型の屋根からマイナスイオンが集中発生する場の中心に鬼瓦があり、招福の印、降魔の印として場をより神聖なものへと変容させ、全体の清涼感をさらに高めていたといえる。その和型の屋根が五軒、十軒、百軒……と葺の波に変わるとき、独特な日本の景観が生まれるのである。

丸市は鬼師の世界では異端である。ただ元々は正統な鬼板屋で職人を多く抱えた手造りの鬼板屋であった。二代目加藤元彦のときに「丸市鬼瓦工場」から「株式会社丸市」に名称を変えたときに今の姿が既にあったように思われる。名前から「鬼瓦」が落ちているからである。丸市は伝統的な鬼板屋から盆栽鉢生産へ、そして今の家紋専門店へと変遷してきたのであった。

参考文献

- 石田高子 1983年 『葺のうた』愛知県陶器瓦工業組合。
 駒井鋼之助 1963年 『粘土瓦読本』彰国社。
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年 『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合。
 吹田市立博物館 1997年 『達磨窯』吹田市立博物館。
 杉浦茂春編 1982年 『高浜市誌資料(六)』高浜市。
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年 『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会。
 高原隆 2002年 「鬼師の世界——三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247。
 _____ 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189。
 _____ 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132。
 _____ 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)」『文明21』第12号：113-165。
 _____ 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(2)」『文明21』第13号：155-175。
 _____ 2005年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)」『文明21』第14号：97-111。
 _____ 2005年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208。
 _____ 2006年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116。
 山下晋司、船曳健夫編 1998年 『文化人類学キーワード』有斐閣。
 ONIX 1992年 『鬼瓦総合カタログ』ONIX。